

出会い

高橋 弘子

厚生省看護研修研究センター

須藤桃代さん、リレー随筆のバトンをどうもありがとうございました。教務主任としてカリキュラム運営の責任者であるとともに実習指導など授業もバッチリ工夫し、北海道の学校らしい助産婦教育をすすめておられるのが目に浮かびます。昨年はカナダでのICM大会にご一緒しましたが、最近はずっくり話せずにいますね。この機会に、前にちょっとだけ話したことがある学習会について書くことにします。

「助産婦と語る会」の誕生

「この頃は実習できる助産所がなくて。学生の頃を振り返っても、助産所実習で技術をみせてもらったという思い出もありません。その点、東京はめぐまれていますね。うらやましい」。これはどこおかしい話だ。うらやんでいても学校ごと引越すわけにはいかない。旅をしてでも会いに行きたいような助産婦を探して、実習させてもらうことだ。世の中にはたくさん素敵な助産婦がいるじゃないの、と思いつくままに指を折ってみる。そして、はたと気づいたことには、私が直接話したことがあるのは、ごく一部の助産婦にすぎない、ということ。その人となりを知らずして、“素敵”なんて言っている場合ではない。

助産婦の活躍ぶりを生で知って、助産婦学生や他の職種、女性たちにも伝えたい。センターの研修生もさそって助産所を見学したり語り合ったりすれば、助産婦教員をめざす研修生にとって教育をする時の底力になるに違いない。そして助産婦同士の輪がしっかりとできれば、大きいことだってできるよね。まずは、自分たちについて知らな

くちゃ。助産婦としての実務のこと、教育のこと、そして行政のことも、今どうなっているのかだけではなく、歴史的事実をきちんと踏まえてわかっていきたい。こんなことを確認し合って、仲間5人による「助産婦と語る会」が誕生した。

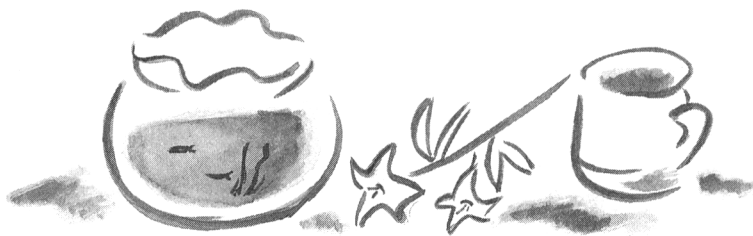
語ること、語り合うこと

はじめは講師から新しい知識を得たい、珍しい体験を聞かせてもらいたい、という面が勝っていたが、じきに「もっと語り合いたい」という言葉がアンケートに書かれるようになった。イギリスのコミュニティ助産婦ターナー節子さんを迎えた時、「あなたはどのように考えますか」と逆に問い返され、浣腸や剃毛という日常業務の是非を考えるきっかけになった。どんなテーマの時も、若い参加者の反応はすばやくて暖かい。笑い、涙、率直な反応が響き合って、心踊る思いを楽しんでいる。

「歴史的なことって、本に書いてあっても興味を持ってなかったけど、本当はどうだったのか、調べてみたくなりました」。参加者のこんな言葉に、この会を創った時の初心に帰り、「これから助産婦として頑張れそうです」の言葉に力づけられ、「助産婦と語る会の支部をつくって語り合います」に大喜びしている。ひとりで聞いたのでは気づけない側面にも光が当たって、本当に得した気がする。

お産婆さんのおうち

「昔の産婆さんは、子供の目にも見えましたよ。お風呂に行く途中に助産院がありましてね。産婆〇〇と書いた看板があって、字が読めるようになってからは通るたびに大声で読み上げたもので



す。大きく仮名が振ってあったから読めるんです。手をつないだ母に、お産婆さんのおうちって、声をはりあげたものです。夜になると、今の交番と同じような赤い電気がついて、まわりの灯が消えてもそこだけ夜とおしついているの」。これは、学生を大切にする教員として私が尊敬している看護婦さんが話してくれたことだが、幼児体験に産婆さんのことが出てくるなんていいなあ。

学習会で助産所を見学させてもらいながら、ふと、この話を思い出す。そして、見学って、とってもいい学習方法だと感じている。見学場所に少しずつ近づきながら高まる期待感。講義を聞く時にくらべ、自分の感性次第、といった感がある。緊張して(時には迷子になったりしながら)着いた時に、迎えてくださる助産所の先生方のあたたかさが、とても嬉しい。建物の外見は地味でも、助産所の内部は最新設備が整っている。電話はコードレス、当然FAXもある。トイレはウォッシュレット。超音波も上手に使いこなしておられる方が多い。そして同時に、腹帯を巻く時には日を選び、臍帯を大切に扱い、出産を家族の祝い事として上手に演出している。食膳を飾りつつ栄養を考え、核家族の現状を考えて工夫を凝らしている。「退院の日には、お赤飯と鯛の御頭つき…いい鯛を選びます。食べきれないから持ち帰り、新しく親になった二人が祝えるように」。最先端の機器と伝統文化を調和させている日本の助産婦って、すごい。

お訪ねする助産所は初めてのところが多くて、見学の企画時は参加予定者が無事にたどり着くまで、ハラハラしてしまう。ハプニングも多い。前日になって突然計画変更ということもあったが、

多いのは迷子になりかけ、ということである。地図を片手にきょろきょろしていたら、「どこを探していますか」と金髪の父子づれに道案内され「〇丁目の〇〇助産院」を連呼したのだったが、あの父子は助産院という言葉覚えてくれたかしら。交番で尋ね、「ここは管轄の地域でないからわからない」と言われて、憤慨したこともあった。これからは、道を聞くにも戦略が必要なようだ。そして思うのは、助産所の看板は目立つのがいい、ということ。その思いが高じて、看板の写真集をつくりはじめ、仲間内で楽しんでいる。

このように学習会の楽しさはいろいろあるが、語り合うことそのものが喜びである。もっと話したそうにみえたら、時間を延ばしてもいい。もっとこんなことを知りたい、もっと語りたい、そんな気持ちを大事にしていると、結果として仲間が増えるだろう。あたたかみの感じられる範囲でゆっくりと、そんな線で行いたいものだ。

* * *

バトンは、北海道の別海町で開業している清水節子さんに渡します。別海町が保健文化賞をもらうのに貢献した清水さんが、助産婦長という地位を離れて開業助産婦へと転身した時の挨拶状に、「生涯、一助産婦として」とあって、助産婦の技術を大切に研鑽してきた人らしい言葉だと感銘を受けたものでした。別海町立母子健康センターからは若い助産婦たちが次々と開業しましたね。その原動力は何だと感じていますか。別海町に腰をすえて親子二代の出産育児に関わってみえてきたことを教えてください。学生寮のストーブのまわりで夜遅くまで話した時のように。